

---

# 真っ暗な世界

霜月 沙羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真つ暗な世界

### 【Nコード】

N4281R

### 【作者名】

霜月 沙羅

### 【あらすじ】

彼は事故に遭って目の前が真つ暗になった私を励ましてくれた。私は彼が大好きだった。でも、だからこそ私はお別れを言わなくちゃいけない。あのことを隠したまま。不自由な私はこれからどうなるのだろうか？

事故に遭って目の前が真っ暗になった私を俊輔くんはいつも励ましてくれた。私は俊輔くんのが大好きだった。だからこそ、俊輔くんと私の関係は自らの手で終わらせなければならぬ。最後の電話は私が事故に遭ってから丁度四ヶ月後だった。

「今日は話があるの」

「何？」

何度も頭の中で唱えた台詞だ。

「私、もう俊輔くんがいなくても大丈夫だよ。だから、別れよう」「え？」

俊輔くんは当たり前前だけど困惑した様子だ。

「別れたいって言ってるの」

「な、何言ってるんだよ。俺は別れない。別れないよ、絶対」

「分からないの？ 奴隷はもういらぬの。用済みなの！」

そう言うときさすがに俊輔くんも黙った。

「さよなら」

そして私は電話を切った。

でも、俊輔くんのいない生活はあまりにも不自由だった。どこに行くのも彼と一緒にだったから。道行く人にぶつかりながらコンビニに行つてパンやおにぎりを買い、後は家に引きこもる日々。

俊輔くんのことは今でも好きだった。自分一人で歩けるなんて戯れ言を口にして、彼の手を振りほどいたことを後悔していた。電話は鳴らない。家には誰も来ない。私はベッドの上でコーラを飲みながら泣いていた。でも、これで良かったと思わなければいけないんだ。それが、彼の為なんだ。

一週間ぶりに鳴った電話に私は出なかった。しばらくして家のドアをノックする音が聞こえた。

「睦美ちゃん、いるんだろ？ 開けてくれよ」

私はドアを開けなかった。

「一人じゃ満足に外出も出来ないだろ？ 別れるのは止めにしようよ。俺、睦美ちゃんのことを心配なんだよ」

「嘘！ 本当は面倒くさいって思ってる」

「そんなこと思ってない」

「だって、こんな私……」

「治るよ。治るから。大丈夫」

その言葉に私は泣きそうになった。そして、ノックする音が聞こえなくなるまで私は布団を被ってそれ以上一言も喋らなかった。

ひとりぼっちのクリスマスは雨が降っていた。実家に帰ればケーキと温かい家族が待っていたかもしれないが、そこまでの気力がなかった。私はコンビニへ行こうと思いついて杖を持って家から出た。

「睦美ちゃん」

すぐ側で声がした。

「俊輔……くん」

「俺は睦美ちゃんが好きだ。大好きだ」

そう言いつて俊輔くんは私を抱きしめた。そして私の指に指輪を通して、

「お願いだ。結婚してくれ」

と言った。夢？ ううん、夢じゃない。飾り物の目から涙が零れる。

「無理だよ……だって私……」

「俺が支えていくから」

「違う、そうじゃないの！ 俊輔くんは分かってない！ 全然分かってないよ！ ずっとだよ？ ずっと支えていけなくちゃならないんだよ？ だって、私の目は……」

「聞いたよ、昨日睦美ちゃんのお母さんから」

「……え？」

「睦美ちゃんの目が治らないって医者に言われたこと。ごめんな、治るから、きつと治るからってずっと励ましてて」

治ると思っていた。また、俊輔くんの顔も綺麗な景色も見られると思っていた。だから二人で頑張ってきた。でも、治らないということ告げられ、ああ、もう私は俊輔くんの側にいちゃいけないと思った。なのに、俊輔くんは……。

「知ってて、どうしてこんなことするの？」

「好きだからだよ」

「でも私、死ぬまで迷惑かけ続けるんだよ？」

「人に頼ることも強さだよ。だから、いっぱい迷惑かけてもいいんだよ。俺が全部何とかするから」

「俊輔くん……」

再び涙が溢れ出した。ふと俊輔くんは私から一瞬身体を離し、手の上に何か冷たいものを置いた。

「冷たっ」

「雪。積もってるよ」

手のひらの雪が溶けてゆくにつれて、私の気持ちは固まった。

「いいの……？」

「勿論。好きだよ、睦美ちゃん」

「……私も、俊輔くんのこと大好き……」

俊輔くんの手が私の頭に乗せられ、目には見えなくても彼が微笑んだのが分かった。

(後書き)

最後まで読んで下さりありがとうございます。「目の前が真っ暗になった私を……」や「自分一人で歩けるなんて戯れ言を口にして……」などは、ダブルミーニングのつもりです。恋愛ものは苦手ですが、書いていて楽しかったです。では、本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4281r/>

---

真っ暗な世界

2011年10月3日05時41分発行